

海外食料需給レポート

(2020年1月)

令和2年1月30日

農林水産省

海外食料需給レポートについて

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(米、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

このレポートは、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

5 本レポートに記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関 (英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会 (IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム (AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

目 次

概要編

I	2020年1月の主な動き	1
II	2020年1月の穀物等の国際価格の動向	2
III	2019/20年度の穀物需給（予測）のポイント	2
IV	2019/20年度の油糧種子需給（予測）のポイント	2
V	今月の注目情報	
	中国の穀物等生産と大豆を中心とした輸入動向	3

(資料)

1	穀物等の国際価格の動向	7
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	8
3	令和元年7月以降の食品小売価格の動向	9

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
2	とうもろこし	7
3	米	11
II	油糧種子	
	大豆	15

【利用上の注意】

(概要編)

I 2020年1月の主な動き

写真 ブラジル南部 パラナ州の大豆圃場
順調に生育 (前年12月31日撮影)

1 南米の生産状況とアルゼンチンの輸出税

ブラジルやアルゼンチンの夏作の大豆やとうもろこしの作付け及び初期生育は、11月から1月上旬にかけての降雨を受け概ね順調に進展しており、2年連続の豊作が期待されている。

なお、アルゼンチンのフェルナンデス新政権は、前年12月14日、財政赤字の改善のため、穀物や大豆、肉類等の輸出税について、とうもろこし及び小麦については約7%から12%へ、大豆及び大豆油かす等については約25%から30%へ引上げを行った。

さらに、12月23日には輸出税を再度引き上げる(とうもろこし、小麦は15%、大豆、大豆油かす等は33%へ)内容を含む「社会連帯・生産性回復法」が施行された。アルゼンチン産穀物等の輸出に影響するとみられ、注視が必要。



2 米国のとうもろこし、大豆の生産状況

前年3月～6月にかけての降雨過多により作付と収穫が遅れた2019/20年度の米国のとうもろこし、大豆の生産量については、アナリストの予想に反し、1月報告でわずかに上方修正されたものの、とうもろこしは前年度より減少し347.8百万トン、大豆も2013/14年度以来6年ぶりに1億トンを下回る96.8百万トンとなり、世界の生産国の座を再度ブラジルに明け渡す見通し。

3 タイの米の生産・輸出状況

タイでは、前年7月の降雨不足による灌漑用の貯水池の水量の減少から、乾季米の作付面積が減少した結果、生産量が下方修正され、18.5百万トンの見通し。

輸出量についても、バーツ高に加え、中国やインドネシアの輸入需要減、ベトナムやインド、中国との輸出競争激化による減少が見込まれている。

これまでタイの国家貿易委員会価格が国際的な米の指標となっているが、最近では、輸出第1位のインドにシェアは大きく引き離され、第3位のベトナムとシェアが拮抗している。中国、ベトナムの安価な価格による輸出攻勢からアフリカでの市場を奪われる等、世界第2位のタイの輸出国としての地位が低下してきている。

写真 タイ中部 スパンブリー県の水田
(前年12月29日撮影)

地方政府から、水源の確保ができないため、雨期まで稲作を待つよう指示があった。
周辺では12月末も全く降雨ない。



II 2020年1月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、12月下旬、190ドル/トン台後半で推移。その後、豪州での乾燥による減産見通しやアルゼンチンの輸出税の2段階引き上げに加え、フランスの鉄道等のストライキによる穀物輸出への影響懸念や1月中旬のロシアの穀物輸出枠設定報道から上昇し、1月下旬現在、210ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、12月下旬、150ドル/トン台前半で推移。12月末にアルゼンチンが輸出税を2段階引き上げたものの、1月中旬の米国農務省需給報告及び米中通商協議の第1次合意の内容を市場関係者が弱材料と捉えたことから、ほぼ横ばいで推移し、1月下旬現在、150ドル/トン台前半で推移。

米は、12月下旬、460ドル/トン台前半で推移。タイ北部での降雨不足による乾季米減産により、タイ産米の供給量が減少する見通しから、価格は上昇し、1月下旬現在、470ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、12月下旬、340ドル/トン台前半で推移。南米の豊作見通しに加え、1月中旬の米中通商協議の第1次合意において中国側の大豆の追加関税撤廃が盛り込まれなかったことで下落し、1月下旬現在、330ドル/トン台半ばで推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2019/20年度の穀物需給(予測)のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から2.6百万トン下方修正され26.6億トン。消費量は、前月より5.6百万トン上方修正され26.7億トンとなり、生産量が消費量をわずかに下回る見込み。

また、期末在庫率は前月から下方修正され29.7%となる見込み(資料2参照)。

生産量は、前月と比較して、小麦と米で下方修正、とうもろこしで上方修正。穀物全体では下方修正され26.6億トンの見込み。

消費量は、前月と比較して、小麦、とうもろこし、米で上方修正。穀物全体では上方修正され26.7億トンの見込み。

貿易量は、小麦で上方修正、とうもろこし、米で下方修正され、4.3億トンの見込み。

期末在庫量は、7.9億トンと前月より下方修正され、期末在庫率は下方修正。

(注：数値は1月の米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2019/20年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前月から上方修正され5.7億トン。消費量は前月から下方修正され5.9億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前月から上方修正され、19.1%となる見込み。

(注：数値は1月の米国農務省「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報: 中国の穀物等生産と大豆を中心とした輸入動向

中国国家統計局の2020年1月報告によれば、2019年末で人口が14億人を超えた。同じく統計局の12月のレポートによれば、2019年産(1~12月)の穀物・芋類・豆類の生産量は、史上最高の664百万トン。一方、人口増や所得の向上に伴い右肩上がりで上昇してきた穀物需要は、ASFの発生等によりここ2年間伸び悩んでいる。

前年12月には米国産大豆や豚肉の免税措置を行い、さらに米中通商協議一次合意に関する本年1月15日の署名にあたり、今後2年間で800億ドルの米国農産物の輸入の約束が公表された。最近の中国の穀物等生産と大豆を中心とした輸入動向についてまとめた。

1 史上最高となった中国の穀物生産量

(1) 史上最高の生産量

前年12月6日に公表された国家統計局のレポートによれば、2019年の中国の穀物、芋類、豆類(以下「穀物等」という)の生産量は史上最高の664百万トン(米はもみ換算)となった。作付面積の減少により米は減産となったが、天候に恵まれ単収が上昇し

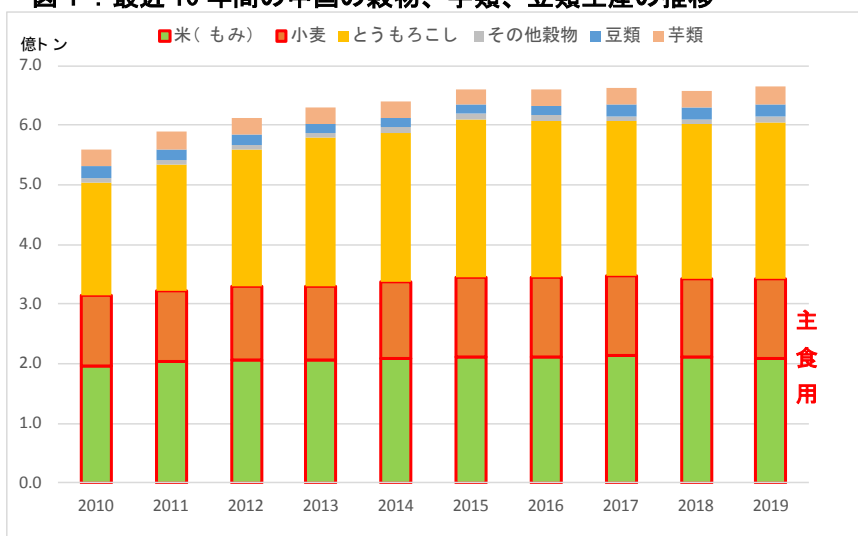
たことから、小麦、とうもろこしは前年度を上回り、穀物は全体

では増産となっている。また、大豆は、とうもろこしからの作付転換政策の結果、史上最高の18百万トンとなる見通し。

(2) 近年の生産動向の推移

最近の中国の穀物等の生産量は、2015年までは、飼料需要の増加に伴い、とうもろこしの生産量が増加してきた。この結果、とうもろこし在庫の積み上がりが発生したため、ここ数年はとうもろこしから大豆に切り替え、とうもろこし生産量は横ばいとなった。なお、2019年は主産地の東北地方で天候に恵まれたことから、穀物等の生産量は、前年度を0.9%上回り史上最高を更新した。主食の米や小麦については、国家戦略として食料自給のため一定の生産量が確保されている。

図1：最近10年間の中国の穀物、芋類、豆類生産の推移



出典：中国国家統計局

2 世界の在庫の6割を占める中国の穀物の在庫状況

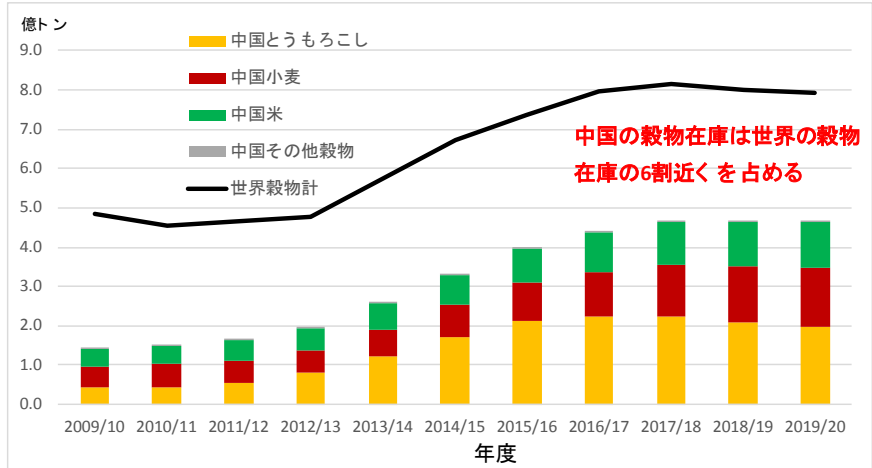
米国農務省(USDA)の推計によれば、現在、中国の穀物在庫(約5億トン)は、世界の穀物在庫(約8億トン)の約6割を占めている。2019/20年度で見ると、世界の穀物在庫のうち、とうもろこしと米は世界の在庫の2/3、小麦は半分以上を中国の在庫が占めている。10年前の2009/10年度は中国の穀物在庫の世界の在庫に占めるシェアは約3割であったが、近年の中国の在庫の積み

上がりによりシェアは倍増した。

世界の穀物の期末在庫率は30%近くあり、高水準と言われているが、この在庫の約6割は中国にあり、国際市場に流通しないとみられる。USDAは前年5月から世界から中国を差し引いた穀物需給データを公表している。

一方、中国政府は穀物在庫を公表しておらず、外部から中国の穀物在庫を確認する方法はないため、世界の期末在庫をみる際には、留意が必要である。

図2：世界の穀物在庫に占める中国の穀物在庫の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2020.01.10)

3 伸び悩む中国の飼料用需要

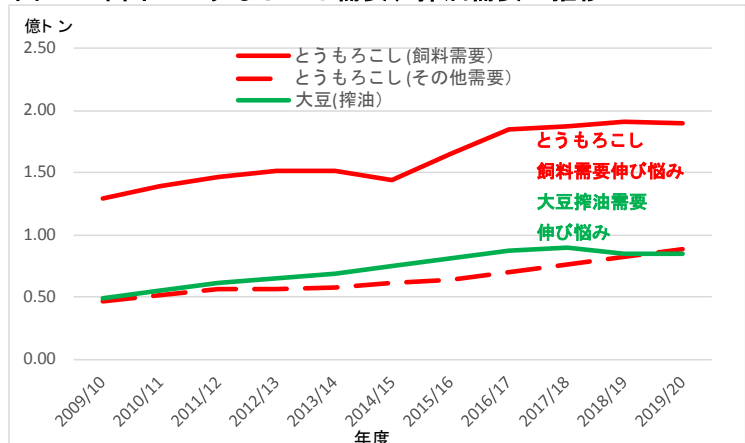
(1) 中国の飼料用需要の伸び悩み

中国の飼料用穀物需要は、人口増に加え、所得水準の上昇から2017/18年度まで伸びてきた。

しかしながらASFの発生により、2018/19、2019/20年度の飼料用需要は伸び悩んでいる。

また、主に副産物が飼料用大豆かすとなる大豆の搾油需要についても同様に伸び悩んでいる。

図3：中国のとうもろこし需要、搾油需要の推移



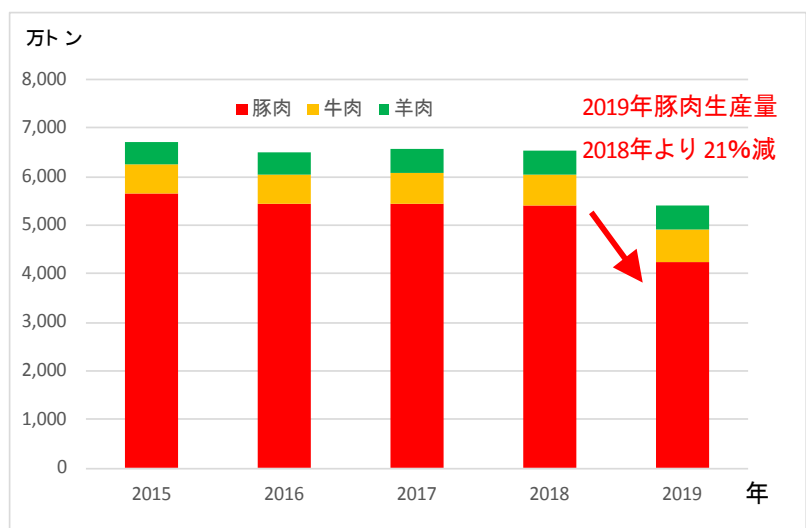
出典：米国農務省「PS&D」(2020.01.10)

(2) 豚肉生産の減少と輸入増

中国の肉類生産の大半は豚肉で、世界の生産量の約半分を占めている。2019年の中国の主要な肉類の生産量を見ると、ASFの影響で豚肉の生産量は2018年と比較して54.0百万トンから42.6百万トンへ21.3%減少した。

豚肉生産量の減少や国慶節の休暇(2019年10月1~7日)に向けた需要増により、2018年8月以降、豚肉価格は大幅に上昇し、11月上旬に豚肉価格はピークに達した。

図4：中国の肉類(豚肉、牛肉、羊肉)生産量の推移



出典：中国国家统计局

そのため、豚肉等の肉類の輸入を増加させるとともに、中国政府は備蓄豚肉の放出を実施。

11月中旬以降、豚肉価格の高騰は収まったが、依然、高水準となっている。

4 中国の大豆輸入におけるブラジルへのシフトと今後の動向

(1) 約1億トンまで増加した大豆輸入

中国政府は、米や小麦といった主食については、基本的に自給を堅持する方針をとってきており、飼料向けが多くを占めるともろこしについても概ね自給を維持してきた。一方、大豆は、輸入に依存してきた。その結果、2017/18年度においては、大豆は約1億トンまで輸入量が増加した。

その後、2018/19年度、2019/20年度においては、ASFの発生による豚用飼料の需要の減少に加えて、中国飼料協会が、輸入原料に過度に依存しないよう、2018年秋、配合飼料における大豆油かすをはじめとする蛋白原料の配合率を引き下げたことや、国内生産の増加もあり、大豆輸入にブレーキがかかった。

(2) 米中通商摩擦による米国産大豆からブラジル産大豆等への輸入の切り替え

米国は、2018年7月には中国産品への追加関税賦課を実施した。中国側も対抗措置として米国産大豆に25%追加課税するなど、米国産品に追加課税を行った。2019年9月には、双方とも追加関税を上乗せし、米国産大豆には5%追加関税が上乗せされた。こうした中、中国の大豆輸入については米国産からブラジル産等にシフトした。

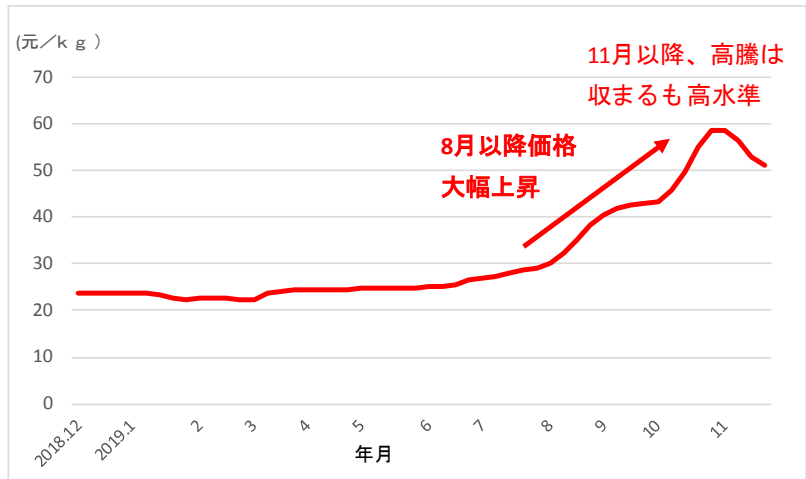
中国の米国産大豆からブラジル産大豆等への調達への切り替えに伴い、2019年の米国産大豆の作付面積も大きく減少、一方、ここ数年のブラジル産大豆の作付面積は大幅に増加し、ブラジルは米国に取って代わり、世界一の大豆生産国・輸出国となった。

ここ2年間の中国の月別国別大豆輸入量(図7)をみると、2018年4月以降、ブラジル産が米国産を上回っている。2019年11月に米国産の輸入が増加したものの、依然としてブラジル産を下回っている。

(3) 米中通商協議一次合意

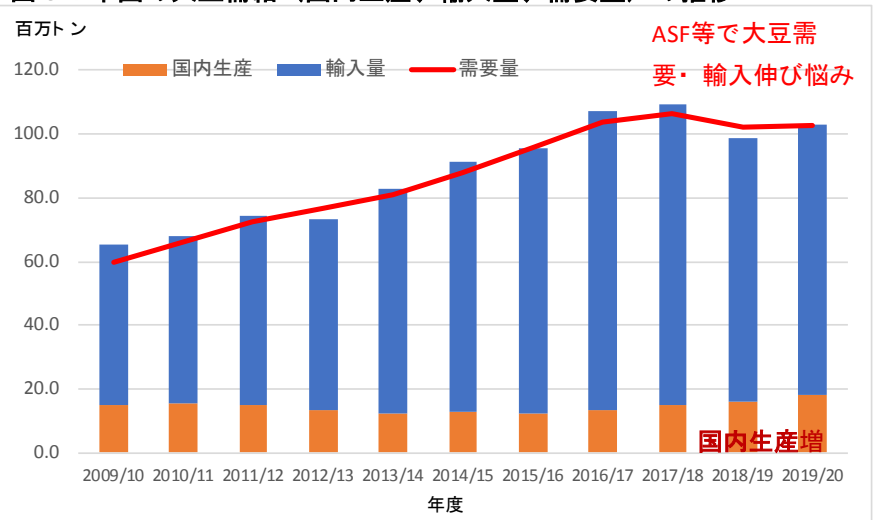
2019年12月6日には、中国財政部が、米国産大豆(及び豚肉)の輸入に関し追加関税の免税措置を講じている旨公表した。さらには、米中通商協議に関しては、12月13日には、米中両国

図5：中国の最近の豚肉市場価格の推移



出典：中国農業農村部資料

図6：中国の大豆需給(国内生産、輸入量、需要量)の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2020.01.10)

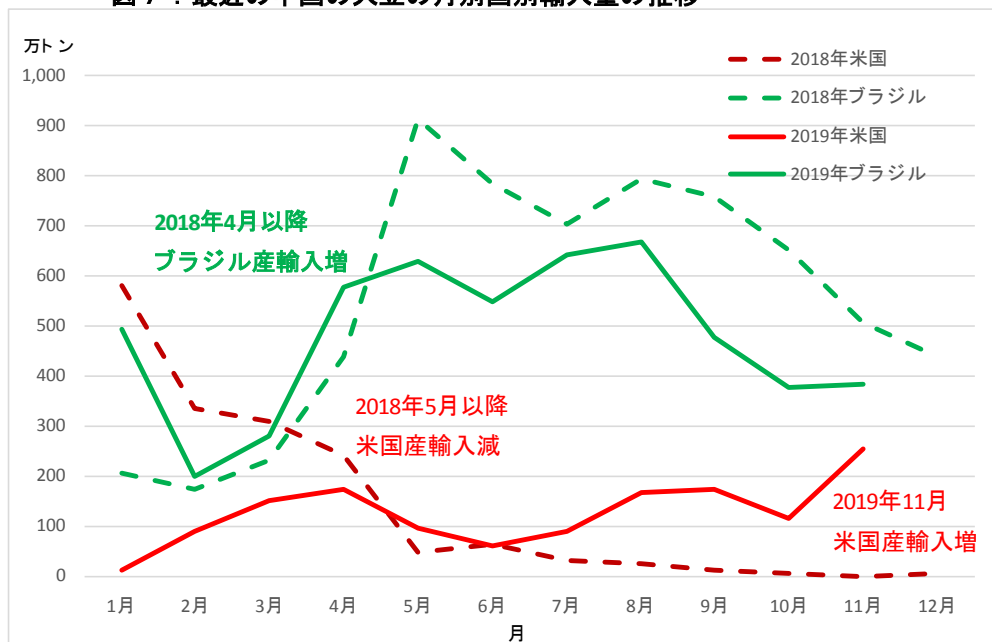
が通商協議に関し一次合意を発表し、2019年12月以降の更なる追加関税の賦課は回避された。

本年1月15日には、ワシントンにて中国の劉鶴副首相と米国トランプ大統領が一次合意に署名した。その際、中国側の米国産農産物の輸入拡大（2017年実績240億ドルと比較し、2020年125億ドル増、2021年195億ドル増、2年間計で800億ドル輸入）等について公表された。しかし、品目別の内訳数量や金額については明記されていない。

(4) 今後の米国産農産物輸入の増加の可能性

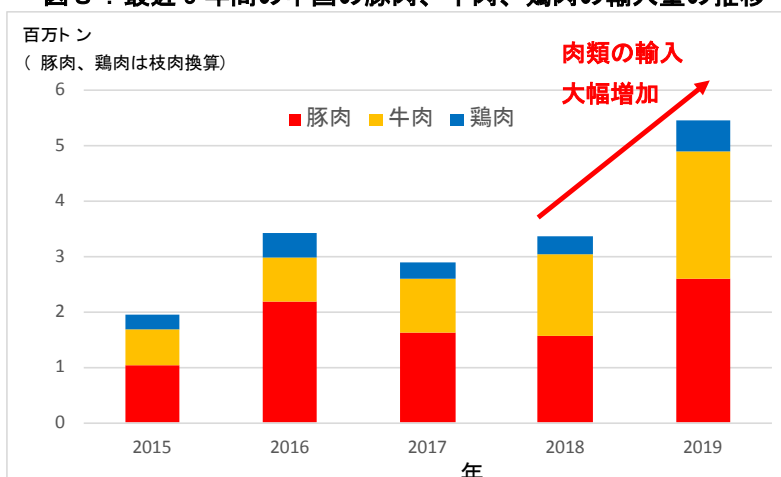
中国の大豆需要は、今のところASFの発生による豚肉の生産減による飼料需要減の影響から伸び悩んでいる。一方で、豚肉の代替として、欧州、南米、オセアニア産を中心に世界各国からの牛肉、鶏肉等の輸入を増加させている（図8）。当面の課題である2020年の米国産農産物125億ドルの輸入拡大の約束は、2017年の輸入金額の1.5倍で、相当高いハードルであることから、アナリストによっては、達成は難しいのではとの見方もある。劉鶴副首相は、一次合意署名後、「需要に応じた輸入を行う」と発言したとの報道もある。さらに、2019/20年度のブラジル産大豆も豊作見通しで、2月には収穫・出荷が開始されることから、短期的に、米国産大豆の輸入が大幅に増加する可能性は低いとみられる。

図7：最近の中国の大豆の月別国別輸入量の推移



出典：中国海関統計

図8：最近5年間の中国の豚肉、牛肉、鶏肉の輸入量の推移



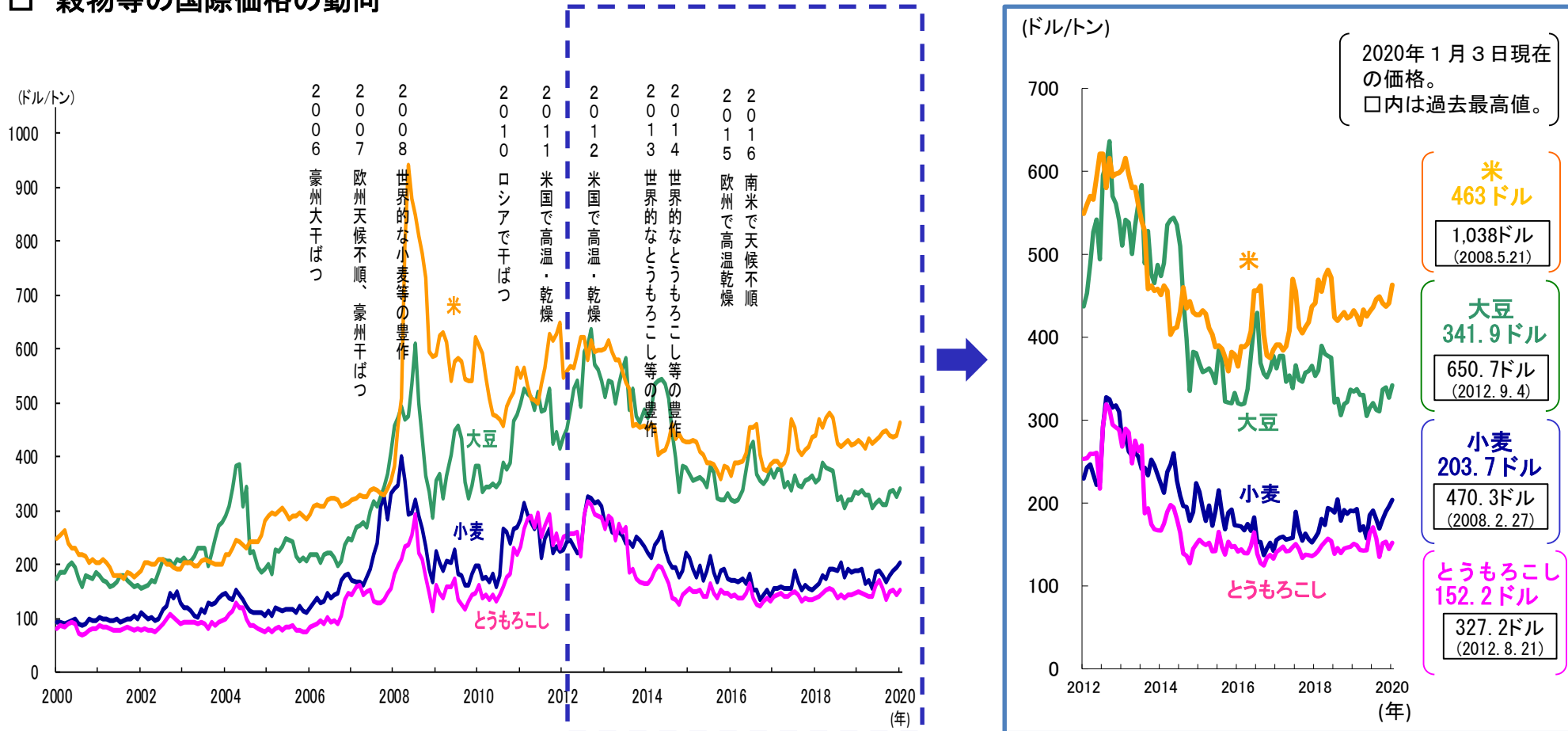
出典：米国農務省「PS&D」
(2020.01.10)

資料1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこし、大豆の豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降横ばいで推移。米は、2013年以降、タイの在庫放出等から低下したが、2017年以降上昇傾向。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



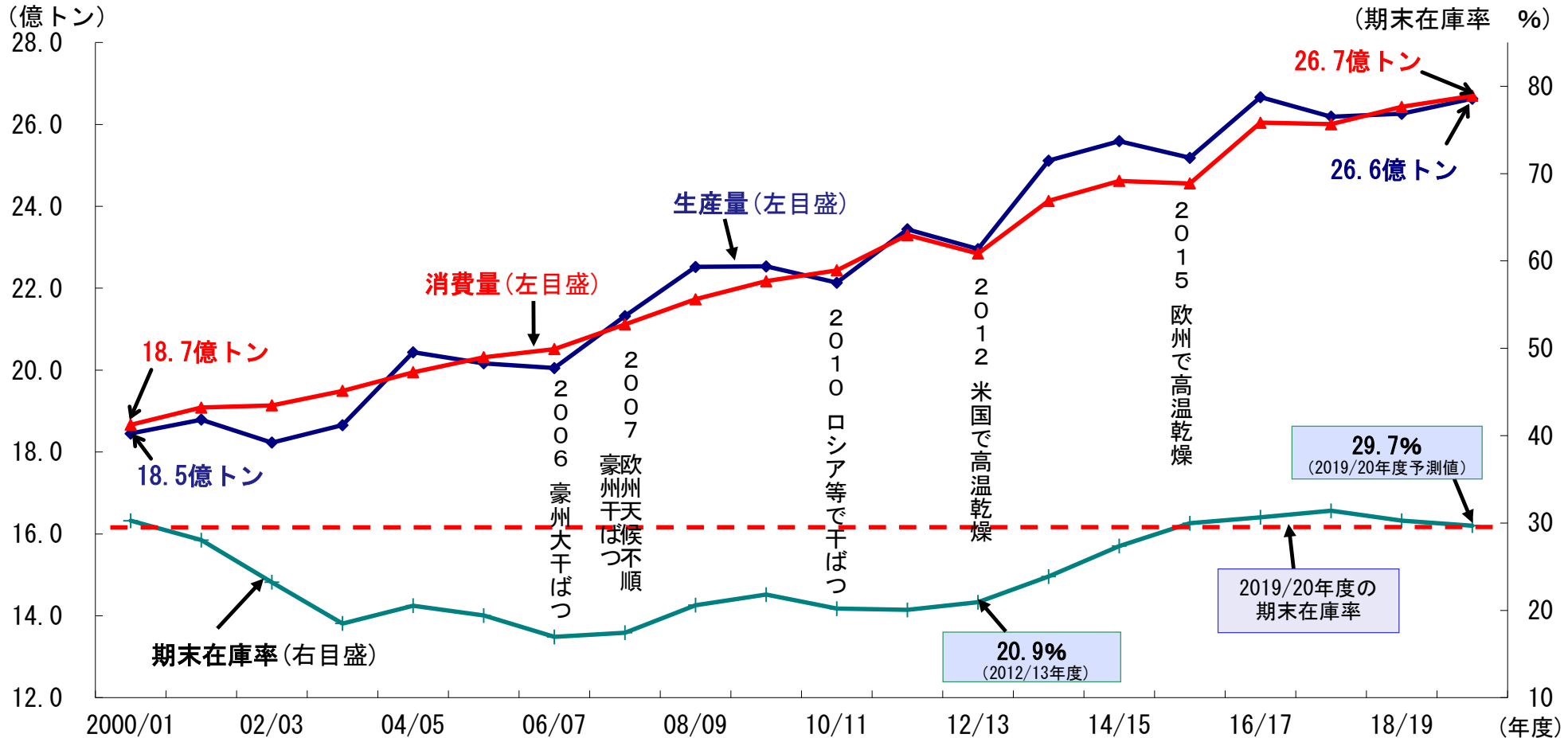
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。(なお、1月3日現在の米価格は2019年12月25日の価格。)

注2：過去最高価格については、米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2019/20年度は、2000/01年度に比べ1.4倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2019/20年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、29.7%となるものの、直近の価格高騰年の2012/13年度(20.9%)を上回る見込み。

□ 穀物(米、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(January 2020)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料3 令和元年7月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

令和元年7月～令和元年12月の食品小売価格の動向

消費者物価指数(総務省)												
品目	H26	H27	H28	H29	H30	R元						上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
生鮮食品を除く総合	97.7	100.0	99.7	100.2	101.0	101.5	101.7	101.6	102.0	102.2	102.2	0.7%
食パン	98.5	100.0	101.1	100.9	101.4	102.6	102.2	102.4	102.4	102.0	102.0	-0.5%
即席めん	94.2	100.0	100.0	99.5	99.0	104.9	105.0	106.0	105.8	105.4	103.8	5.2%
豆腐	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	101.1	101.0	101.4	101.5	101.2	101.0	0.2%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	97.8	94.5	93.3	93.3	92.1	92.9	92.9	93.0	92.3	0.2%
みそ	100.6	100.0	99.4	99.1	99.6	101.4	101.3	102.0	101.3	101.8	102.0	2.3%
チーズ	97.9	100.0	99.3	98.8	102.6	103.3	103.8	103.9	102.3	104.3	102.7	0.3%
バター	95.0	100.0	101.5	101.7	102.0	102.6	102.5	102.4	102.4	102.2	102.4	0.0%
マヨネーズ	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	95.2	94.1	95.6	94.7	93.6	94.2	-0.5%

資料:総務省消費者物価指数

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

【参考】令和元年8月～令和2年1月の食品小売価格の動向

食品価格動向調査(農林水産省)													
品目	H26	H27	H28	H29	H30	R元					R2		
	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.7	100.0	100.9	99.5	99.8	103.2	102.1	103.0	103.4	103.0	103.2	0.2%	-0.4%
即席めん	93.3	100.0	99.8	99.6	99.5	108.5	108.5	107.9	107.9	108.5	108.5	0.0%	6.5%
豆腐	100.3	100.0	96.9	95.6	95.0	95.1	95.5	94.7	94.7	94.7	95.5	0.8%	-0.8%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	96.3	94.6	94.6	99.2	99.9	98.6	98.9	98.3	98.3	0.0%	-3.9%
みそ	99.0	100.0	99.8	101.6	106.8	110.6	111.0	111.5	110.6	111.0	110.8	-0.2%	-0.8%
チーズ	97.1	100.0	100.0	99.7	103.2	105.8	107.4	106.4	106.4	106.4	105.3	-1.0%	-2.4%
バター	94.6	100.0	101.3	102.0	102.3	102.7	102.7	102.7	103.0	103.0	103.0	0.0%	0.5%
マヨネーズ	101.6	100.0	99.2	98.4	97.2	101.4	103.1	102.1	100.0	100.7	101.4	0.7%	-3.2%

資料:農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

注2:調査は原則、各都道府県10店舗で週1回実施。ただし、平成30年10月以降は月1回実施。

注3:調査結果は調査期間中の平均値で算出。